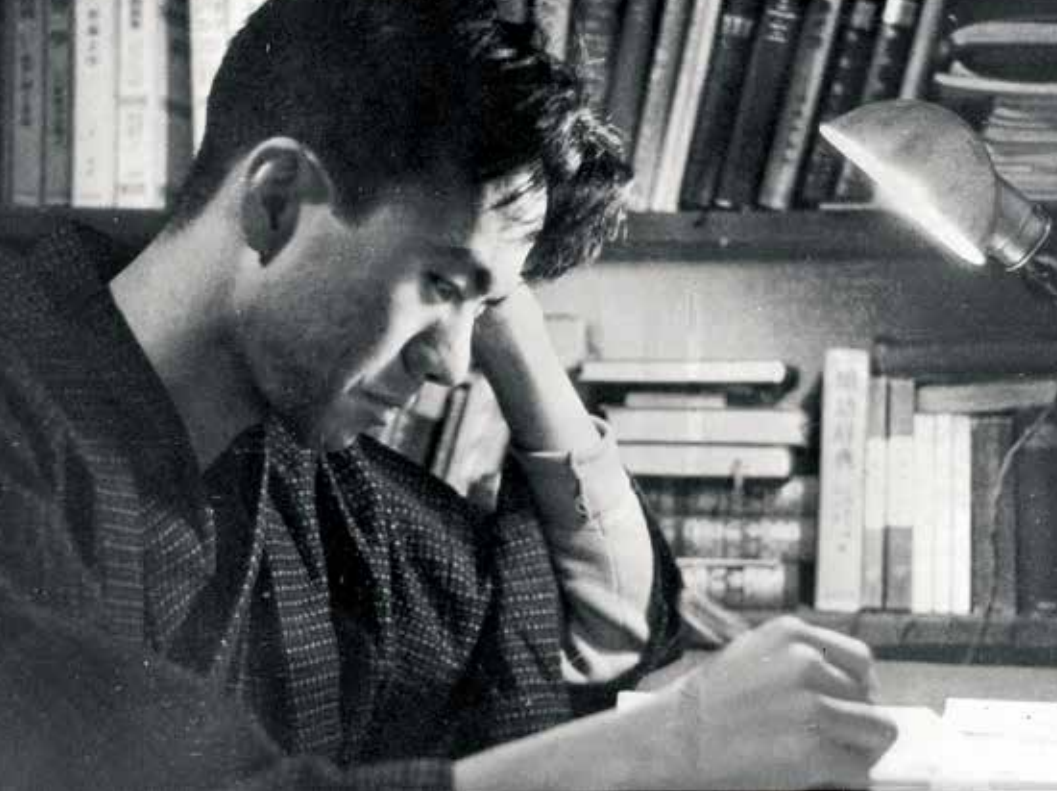




金城哲夫資料館(南風原町津嘉山：松風苑内)

ウルトラマンシリーズの 脚本を手掛けた沖縄を代表する 脚本家・演出家のひとり

きん じょう てつ お

金城 哲夫

1938(昭和13年)に津嘉山で生まれ、特撮で知られる円谷プロでウルトラマンシリーズの企画立案、メインライターとして脚本を手掛けました。沖縄方言や沖縄をイメージさせる怪獣や題材を取り入れ、チブル星人(方言で頭)、ジラーズ(次郎父さんをもじったもの)という怪獣は有名です。それ以前は映画「吉屋チルー物語」製作や、沖縄に帰郷後は沖縄国際海洋博覧会の演出を手掛けましたが、昭和51年、37歳の若さで死去しました。

南風原人物列伝

世界で初めて空を飛んだ人、ウルトラマンの生みの親のひとり、
海外で活躍したした人たち。
南風原には誇りにする人がいっぱいいます。

ブラジル日系人初の歯科医として活躍

きんじょう やま と

金城 山戸

1893(明治26)年、南風原町津嘉山生まれ。1908年、当時まだ14歳の彼は第1回ブラジル移民として遠くブラジルの地へ渡りました。一緒に移民した2歳年下の儀保蒲太とは無二の親友でした。山戸は歯科医の奉公人として働き、その後勉学を重ね、日本人移民の中から初の歯科医師となり、現地ブラジルで活躍しました。彼は日系人社会だけでなく、現地の住民らの歯科医療にも貢献し、たくさんの人々から敬愛される人格者でした。惜しくもブラジル移民80周年の前日、1988年6月17日に95歳でその生涯を閉じましたが、その功績は今もなお現地で語り継がれています。



“夢を賭けた”第1回ブラジル移民、イッパチ

ぎ ぼ か ま た

儀保 蒲太

1895(明治28)年、南風原村津嘉山に生まれたイッパチは、日系人で最初の歯科医師になった津嘉山出身の友人、金城山戸らとともに、1908年、第1回移民としてブラジルへ移住しました。イッパチというニックネームは、この移民船・笠戸丸の中でつけられたようです。山戸とイッパチは幼なじみで、山戸は医師へ、イッパチは賭博の道へ入りました。花形賭博師として活躍したイッパチは、稼いだお金を困窮している沖縄県人に分け与えました。また日系人社会の福祉関係で篤志家としても知られています。



ブラジルで築き上げた大企業 PANCOの社長

よ な みね きよ てる

与那嶺 清照

1927(昭和2年)、宮城生まれ。9歳の清照少年は家族6人で日本を離れ、南米のブラジルの大地を踏みしめました。バナナ作りや野菜作り、カステラ製造会社、パン屋などの仕事をこなし家族で支え合って働きましたが、16歳の時に父親を23歳の時に母親を亡くしてからはパン工場で働く傍ら、夜空いた釜を借りて独自のカステラを販売して生計を立て、やがて独立しました。常に創意工夫を重ね、インスタントラーメンやビスケットなどの商品も増やし、パン工場の敷地内に製品をパッケージするプラスチック工場や、機械修理場、金属加工工場などを兼ね備え、独自の勢力を伸ばしていきました。今では約7,000人の社員、ブラジル各地に9つの大規模な工場を持つブラジルーのパン屋「PANCO(パンコ)」として一大企業を設立しました。

ライト兄弟より先に飛んだ男

飛び安里

18世紀後半、鳥のように大空を羽ばたいた人、それが南風原町津嘉山に住んでいた「飛び安里」です。津嘉山の仕立森(したていむい／現在の津嘉山小学校)から津嘉山公民館までの150m～200m近くを飛んだとされています。「鳥のように飛んでみたい」という人類の夢を実現させ、世界初の動力飛行で知られるライト兄弟よりも何と100年以上も前の快挙として語り継がれ、高津嘉山(たかつかざん)には初飛翔顕彰碑も建てられています。



飛び安里初飛翔記念碑(高津嘉山)



翼の1/2スケールレプリカ

どんな飛行機？

鳥のように翼を羽ばたかせながら飛ぶ「羽ばたき式飛行機」と呼ばれるもので、弓の弾力を活かし、鳥の翼を模した羽を付け、足を上下させて羽を動かしました。初飛行の時には予想以上に高度が上がってしまったため、命綱を託されていた妻が慌てて引っ張ったため、バランスを失って自宅の台所付近に落ちてしまったという逸話もあります。

「飛び安里」の人物像

人物については諸説あり、安里周富(あさとしゅうふ／1748～1799年)、安里周當(あさとしゅうとう／1765～1823年)、安里周祥(あさとしゅうしょう／1797～1867年)の3人が挙げられていますが、最も有力なのは周當です。琉球王朝のお抱え花火師だったとされていますが、その人物や設計図等の資料はわずかでした。しかし、長年にわたりその偉業は伝承されており、資料集も南風原文化センターから発刊されました。

アルゼンチンで洗濯屋、コルドバ日本人学校の建設

おお しろ もり きち

大城 守吉

1895(明治25)年、兼城生まれ。ペルー移民から転じてアルゼンチンのコルドバ市で、洗濯店を経営しました。懇切丁寧な仕事は信頼を集め、仕事を軌道に乗せました。その後妻を呼び寄せ、もらい子の守徳を実子として育て、社会事業や慈善事業への多大な協力を惜しまない人格者でもありました。ところが、昭和12年に日本人学校の建設準備で帰国し、沖縄から香港経由でアルゼンチンへの帰途の際、停泊していた船にわたる小型船のボイラーが爆発して爆死しました。45歳の若さでした。



なかんだかり ちく べー ちん

仲村渠 筑親雲上 手習所教育の先駆け

1833(天保3)年生まれ、善縄大屋子の子孫と言われる仲村渠筑親雲上が首里の大美御殿の奉公先で儒学筆算を習い、帰郷後仕事の傍ら、明治元年手習所を開き村の子弟に勉学の機会を与えました。明治31年に南風原村に小学校が創立されましたが、それ以前に教育が施されていたことになります。今日でも宮平が教育部落と言われ、教育熱が盛んであるゆえんとして知られています。明治15年上杉県令の学事視察の際にも宮平の手習所の取り組みを賞賛され、教育の先駆けの地として、昭和53年に宮平公民館の敷地内に「手習所之跡」の碑が建立されました。



「手習所之跡」の碑(宮平公民館敷地内)

いとまん べー ちん

糸満 親雲上 国頭の山賊を討伐する

1640(尚豊王19)年大干ばつがあり、宜野湾・北谷方面に田園が枯れ五穀も実らず、餓死者まで出るほどの被害がでました。その時、糸満親雲上は耕作奉行となって宜野湾から北谷の枯渇しそうな水田に水を引き、地元の人たちを安心させ、天災を防いだ人物として知られています。また、国頭に潜む山賊が道行く人の衣服を脱ぎ取ったり、人家の財物や牛馬を盗んだり住民を不安に陥れていたところ、琉球王府に命じられて盗賊を彼の策略でみごとに討伐した賢人としても知られています。その子孫は、宮平から喜屋武にかけて多い赤嶺姓(山口門中)です。